

「人生の解釈力」とは、「人生の物語」を生み出す力のこと

このように、我々の人生において、「不幸な出会い」と思えるものを「意味のある出会い」に転じ、さらに「有り難い出会い」に転じていくためには、「その出会いの意味を深く考える」ことを通じて、「人生の解釈力」を身につけ、磨いていかなければならない。

では、「人生の解釈力」を身につけ、磨くとは、どういうことか？  
端的に述べよう。

それは、心の中で「人生の物語」を生み出す力を磨くことである。

例えば、先ほどのカナダの出来事を、どう解釈するか？

一つの解釈は、すでに述べたように、「カナダに旅行に行ったら、ガソリンスタンドの主人と口論になった。しかし、運悪く、帰りの道で、その店の前で車が故障したため、その車を修理してもらうため、仕方なく、その主人に謝った」という解釈である。それは、言葉を換えれば、そうした「人生の物語」を心の中に生み出したということである。

もう一つの解釈は、「カナダに旅行に行ったら、ガソリンスタンドの主人と口論になった。しかし、帰り道で、車が故障したら、丁度、それは、その店の前であった。それは、心がぶつかった人と和解することのできる『しなやかな心』を身につけるために、自分と与えられた試験であった」という解釈である。これも、そうした「人生の物語」を心の中に生み出したということである。

この二つの解釈、「どちらが正しいか？」という議論には、意味がない。そこには、科学的法則のように、誰が見ても正しい「客観的解釈」というものがあるわけではない。

我々が問うべきは、「どちらの物語の方が、自分の心に素直に入ってくるか？」であり、さらに言えば、「どちらの物語の方が、自分の心が癒されるか？」「どちらの物語の方が、自分の心が成長できるか？」であろう。

そして、我々は、人生において、こうした「物語」を、意識的、無意識的を問わず、心の中に無数に生み出しながら生きている。

それは、特に、人が、人生を振り返り、「想い出話」を語るときに、顕著である。

例えば、我々は、次の様な言葉を、ときおり耳にする。

「あの人に出会ってから、私の人生は、おかしくなった。あの人は疫病神だ」

「あの人は、自分にとって、幸運の女神だ。いつも、素晴らしい機会を創ってくれた」

「我々は、この社会貢献の事業を成し遂げるために、何かに導かれ、巡り会った」

「彼と彼女は、結局、『運命の赤い糸』で結ばれていたんだね」

「私が育った家は、父が専制君主のように振る舞う、息の詰まる家でした」

こうした言葉の中に出てくる「疫病神」「幸運の女神」「何かの導き」「運命の赤い

糸」「専制君主」といった言葉は、科学的に誰もが認める「客観的な事実」ではなく、その人にとって、その出会いが、そのように解釈できるという意味での「主観的な物語」に他ならない。

そして、我々が意識的、無意識的に生み出す「人生の物語」は、ときに、自分の人生を否定し、惨めで悲しいものに感じさせていく一方、ときに、自分の人生を力強く肯定し、励まし、癒していく。

「人生の解釈力」とは、ある意味で、人生において与えられた出会いや出来事を前に、そこから「自らを励ます物語」「自らを癒す物語」「自らを成長させる物語」を生み出していく力のことでもある。

あのカナダの出来事は、著者の心の中では、いまも、ささやかな「成長の物語」である。